

『当麻曼陀羅疏』所収説話出典考

〔キーワード〕 当麻曼陀羅疏／当麻曼茶羅／聖聡／注釈書／仏教説話

はじめに

『当麻曼陀羅疏』（以下『疏』と略す）は、室町時代の浄土僧西誉聖聡（一三六六～一四四〇）が著した、当麻曼茶羅の注釈書である。当麻曼茶羅を掲げて談義注釈をする曼茶羅講説は、中世から近世初期にかけて浄土宗で盛んに行われた。

『疏』はその初期の姿を残す貴重な資料である。本書には説話が豊富に含まれ、その数は長短あわせて二百話ほどにのぼる。これほど多くの説話をもつ文献でありながら、説話集という範疇からはずれるためか、これまで『疏』所収説話全体を総体的に見渡す研究は試みられていない。『疏』の引く説話の半数に出典を明示する記述があり、出典を探し当てるといふ説話研究の興味をそそらない文献だったことも、研究が立ち後れている要因の一つと思われる。

しかし、『疏』に示された出典には多種多様な文献名をみることができ、それらは聖聡の学問の幅広さ、ひいては彼が学問的基盤を形成した談義の場および談義所での、学僧たちの学問の豊かさを知る格好の資料である。本稿では『疏』所収説話のうち、出典が明示されているものを中心に考察し、室町期浄土宗の学僧と説話との関わりを論じてみたい。

なお、所収説話の内容を簡略に記し一覧化した拙稿「『当麻曼陀羅疏』所収説話一覧―出典・関連説話―」（『人間文化研究年報』第二四巻、二〇〇一年三月）を併せてご参照いただければ幸いである。

一、『観無量寿経』と注釈書

当麻曼茶羅は『観無量寿経』を画像化したものである。したがって、『疏』は曼茶羅画像の注釈書であると同時に『観無量寿経』の注釈書としての性格を兼ね備え

上野 麻美

る。『疏』には本経からの説話の引用のほか、本経注釈書や当麻曼茶羅注釈書から引用した説話も多い。先行注釈書の説話を後の注釈書が用いるという、伝承経路が確認できる例として注目したい。

①『観無量寿経』

『観無量寿経』は浄土三部経の一として浄土宗で重んじられる經典である。本経は、その前半に、阿闍世太子が調達（提婆達多）にそそのかされて父頻婆娑羅王を幽閉し、さらに母韋提希夫人をも殺そうとする物語を置き、後半には、夫人の願いによって、釈尊が極楽浄土を観見する十六種の観法を説く場面を記す。經典自体が韋提希夫人説話とも呼ぶべき一つの説話を成している。

『疏』では、「経曰」と記して本経を引用した説話は巻十一と巻十二に見える二話だけだが、本経を典拠としながら聖聡が膨らめて作ったと思しき出典未記載の説話もある。例えば、夫人が王に密会する場面を語る巻十の話は、夫人の心情が美文調で吐露されていたり、夫人と看守とのやりとりが描かれていたり、經典にはない記述が大幅に加えられている。こうした部分は、談義注釈の場での語りを映したものとと思われる。

②『観無量寿経疏』

『観無量寿経』については、慧遠『観無量寿経義疏』、吉蔵『観無量寿経義疏』など多くの注釈書が著されたが、日本浄土宗においては、法然によって善導『観無量寿経疏』が浄土宗義の綱格とされて以来、最も重んじられた。当麻曼茶羅はその構成を本書に拠って成すゆえ、『疏』にも本書からの引用が目立つ。そうした引用のなかに説話を含む箇所がある。例えば、水と火の二河の間にある白道を絶対絶命の者が渡る、二河白道説話（巻三）は、『観無量寿経疏』巻四にみえる著名な話である。

③ 『当麻曼陀羅不審抄』

本書は当麻曼茶羅の注釈書の一で、著者は不明である⁽¹⁾。仏教大学図書館蔵本は、書写奥に見える人名によって、鎮西流で書写されたと思われる本だが、奥書に「此三卷相伝西師御作也。斯四十八卷鈔有誤積耳」とある。「西師」を西誉聖聡、四十八卷鈔を『当麻曼陀羅疏』四十八卷と解すならば、『当麻曼陀羅不審抄』を聖聡作とする誤伝があったことになる。鎮西流で本書を重んじた様子が伺えよう。

『疏』では新曼茶羅の制作秘話(卷三一)を本書から引くほか、中将姫の父の名に関する注釈や、当麻曼茶羅の凶柄の細部の解説でも本書を随所に引いている。また、出典を記さず本書に拠っている記述は多い。そうした出典未記載話のなかでも注目されるのは、壬申の乱説話(卷六)である⁽²⁾。天武天皇が大友皇子に追われて逃げる途中での逸話を、『疏』は出典を示さずに載せている。『疏』がいう「うぐい」については『当麻曼陀羅不審抄』にない部分ゆえ、『疏』が本書以外の資料も参照したことは間違いないが、話の骨子は本書に拠ったとみてよからう。

『疏』は本書のほかにも、『五巻抄』『七巻抄』『了恵八巻抄(了恵抄)』といった注釈書から説話を引用している。これらはいずれも佚書であるが、『疏』にみえる逸文から推測するに、当麻曼茶羅の注釈書であると判断される。聖聡が『疏』を編纂するにあたって、あらゆる注釈書を博搜したさまがうかがえる。

二、その他の経典

『疏』がその本拠たる『観無量寿経』の説話を引くことについては、前章で検討したが、『疏』はこの他にも、さまざまな経典から説話を引いている。いま、例を挙げるならば『清浄覚経』『阿含経』『涅槃経』『捺女経』『調達地獄経』『須彌四域経』『四無量経』『阿育王経』など、枚挙にいとまがない。こうした引用経典の幅広さは、聖聡の学識の豊かさを示すが、これらのなかには経典に直接拠ったのではなく、注釈書や類書など他書からの孫引きが含まれる可能性があることを注意しなければならない。ここでは引用経典の一々に触れることはできないゆえ、疑経享受という点から注目される『浄土本縁経』を取り上げて検討する。

① 『浄土本縁経』

『疏』では本話の出典を『浄土本縁経』と記すが、本経は正式名を『観世音菩薩往生浄土本縁経』という。本経は、法然門人長西の作とされる『浄土依憑経論章疏

目録』(鎌倉中期)にその名が見え、浄土宗で早くから用いられた経典であったようだ。『仏書解説大辞典』は本経を西晋代の疑経とするが、牧野和夫は日本撰述の疑経と推測する⁽³⁾。

聖聡は『疏』卷三五に、早離速離の話として知られた観音因縁説話を、本経からかなり長く引用している。実母を失い、継母に捨てられた早離と速離の兄弟が、絶海の孤島で死ぬこの話は、母を阿弥陀、父を釈迦、兄弟を観音・勢至とする本生因縁譚である。本話は大須文庫蔵『往生要集裏書』上巻・『宝物集』卷三・『直談因縁集』卷八一・真福寺蔵『往因類聚抄』下巻・静嘉堂文庫蔵『孝行集』・『草案集』⁽⁴⁾にみえ、また『聖覚四十八願釈』にも本経の一節が引用されており、本話および本経典は談義唱導の場面でよく用いられていたようだ。さらに、『月日の本地』の典拠でもあり『実語経注』や『琉球神道記』卷四⁽⁵⁾にもみえることから、中世に流布した説話であることが知られる。

聖聡は『観念法門私記見聞』上巻で『浄土本縁経』の疑経説に触れ⁽⁶⁾、「私二云ク。設ヒ偽経ナリトイヘドモ、仏説ニ違ワザレバ何ゾ難端トナサザラン」といつている。聖聡は疑経であることを知ったうえで、本経を引用しているのである。『疏』での本経の引用は、疑経と知りつつも敢えてそれを談義の世界に取り入れようという、疑経享受の実態を具体的に示す貴重な例といえよう。

三、法然伝と語録

『疏』所収説話の出典のなかには、『安楽集』『往生要集』『往生拾因』など、一般に浄土僧が親しんだ書がいくつか含まれる。聖聡はこうした浄土典籍を熱心に研究し、『往生拾因見聞』などの注釈書も記している。ここでは、これら浄土典籍のうち法然に関わる二書を取り上げる。

① 『法然上人行状絵図』(四十八巻伝)

『疏』卷十九には「上人ノ伝ニ云」として、ある女が夢で法然の墓参りをして蓮華をもらう話を引く。法然の伝記は多数あって、「上人ノ伝」が具体的になにを指すのかを直ちに判断はできないが、おそらく四十八巻伝と通称される『法然上人行状絵図』の伝本の一つではないかと考えられる。四十八巻伝は、法然と浄土宗鎮西流との結びつきを誇示した伝記で、聖聡も本書に親しんだようだ。『疏』では「伝聞」として、熊谷入道の関東下向の逸話(卷十六)や、法然と叡空が念仏の優劣を

論争した逸話(卷二一)を載せるが、いずれも四十八卷伝の内容に一致する。また、聖聡は『大経直談要註記』卷四に皇円が蛇に転生した話を載せるが、引用の最後に「是レ上人四十八卷ノ伝第三十卷ニ之レ有」と記す。さきの『疏』の二話には出典が記されないが、皇円の話も「伝聞」という書き出しで引用が始まり、最後に四十八卷伝に載る旨が記さるゆえ、『疏』の二話も四十八卷伝を出典とすると考えよう。以上から判断して、『疏』卷十九にいう「上人ノ伝」は四十八卷伝の伝本の一つとしてよいと思われる。ただし、『大経直談要註記』引き皇円説話では四十八卷伝を出典とする旨を記した後に、「余伝ニハ」として異説を載せることから、四十八卷伝以外の法然伝も聖聡が見たことが明らかなので、彼が参照した法然伝が数種あったことは注意しておかねばならない。

②『黒谷上人語燈録』

『疏』は卷十八に、ある人が法然に庭造りを相談した話を『黒谷上人語燈録』から引く。本書は、さきに見た『当麻曼陀羅不審問答抄』の著者かとも言われている了恵道光の著作である。聖聡は当麻曼陀羅の注釈書と推定される「了恵八卷抄」(佚書)も引いており、『疏』執筆にあたって道光の著作を多用している。

道光と聖聡は同じ鎮西流だが、所属する派を異にする。鎮西流は、良忠没後に六人の弟子がそれぞれ自派の正統性を主張しながら六派に分かれたが、道光はそのうち京都を本拠とした三条派の派祖である。一方、聖聡は、主流となった良暁を派祖とし関東を基盤として活動した白旗派の僧である。良忠没後の六派の分裂にあつて室町初期ごろに白旗派と名越派の激しい論争が活発化していたことなどを背景におくと、聖聡が自派の派祖ではない道光の著作を重んじたことは特記すべき点である。

四、師聖岡の著作

聖聡の師了誉聖岡は浄土宗のみならず、天台宗、真言宗、禅宗を兼学した博識の学僧であつたことで知られる。彼の五十余もの著作はそのほとんどが仏書であるが、『日本書記私鈔』『麗気記私鈔』といった神道関係書や『了誉古今序註』といった文芸関係書もある。こうした聖岡の幅広い学問を聖聡が吸収し、宗学上多大な学恩を受けたことはいまでもないが、説話享受という点でも聖岡が及ぼした影は大きかつたようだ。

①『古今序註』

本書は『古今和歌集』序の注釈書であるが、多くの興味深い説話を含むことで知られる。『疏』卷十一には「古今序註了誉集」と出典を明示して富士山の異名由来譚を引く。

また、『疏』ではこの他に、卷十八に本書の影響とみられる玉泉坊説話を載せている。聖聡はこの玉泉坊説話を『禅林小歌註』にも引き、また『厭穢欣浄集』上巻では本話を語つたあとに「此事ヲ古今ノ序ニ哥ノ道ニハ鬼神モ和キ、心ヲトラカス中ニ鬼ノ正ク哥心ニトラケル證拠ニソナフ」と記し、『古今序註』からの引用であることを示す。『疏』では「私西云」と記すのみで玉泉坊説話の出典を示さないが、以上から推測して了誉の『古今序註』を出典と見て誤りない。

本書は聖岡が常陸の浄土談義所瓜連常福寺で成したものだが、こうした外典が談義所を背景として編まれ享受されたことは、そこでの学僧教育が、仏書だけでなく文芸にも及んでいたことを示しており注目される。

②「了誉草」

『疏』卷四の麻福田丸説話、卷五の青海曼茶羅縁起譚、卷二九の顔貌顔鳥説話は、いずれも説話の末尾に「了誉草」と出典を記した割注をもつ。これは特定の書名をいうのではなく、「了誉聖岡作の説草」の意であると考えられる。説草とは説教の手控えをいい、その性格から原初形態のまま保存されている例はあまりなく、『疏』が引く「了誉草」に関しても、現在知られる聖岡の著作にはこれらを収めたものはない。それぞれ「了誉草」として単独にあつたものを聖聡が引用したと思ふ。

『疏』が引く聖岡の説草は一編の物語として整っており、美文調の文体を混ぜ、読者の心を引く名調子で綴られており、短編ながら唱導文学の名作といつてよい。唱導の場での語りを彷彿させる貴重な逸文である。

③聖岡の談話

聖聡は、聖岡の談話からも説話を享受していたようだ。『疏』卷六には、当麻寺創建説話からんで、壬申の乱の経緯を語る説話が記されている。話の骨子は先に検討した『当麻曼陀羅不審問答抄』に拠ると推測されるが、一連の話のうち、鮎の包焼説話については聖岡の説が紹介されている。聖聡は、密告者を皇極天皇であると記した後に、「或口筆了誉云」として大友皇子の息女を密告者とする聖岡の異説を載せる。「或口筆」とは聖岡の談話を書き留めたものと解

してよからう。

また『疏』卷三八の、地藏に帰依した寡婦の話については「了誉上」⁽⁹⁾。澄田地蔵千体供養時仰也」と割注があり、地藏の千体供養の場で聖岡が語った話であったことがわかる。興味深いことに、聖聡は割注の冒頭に「本拠尋ヌベシ」と記している。『疏』では本話を「玄奘三蔵西域記云」として引くが、実際にはこの出典名が示すと思われる『大唐西域記』に本話はない。おそらく、聖聡が出典確認をしたところ、原典になかったので「本拠尋ぬべし」と注したのであろう。ここには、師説を鵜呑みにしない厳正な聖聡の態度が表れている。

聖聡は『名号万徳鈔』に、富士山の水請灌伝承を「近比、了誉上人之御物語云」として引く。先にみた『古今序註』や「了誉草」などとあわせて、聖岡がいかに説話に関して豊富な知識をもっていたかを知ることができる。聖聡の説話への興味関心の深さは師聖岡の影響によるところが多であったといえよう。

五、往生伝

一般に往生伝は平安期に盛んに作られたが、法然以後は下火となり江戸期に再燃したとされる。しかし近年、谷山俊英が中世往生伝に光を当てそれらが唱導に用いられた可能性を指摘している⁽¹⁰⁾。『疏』での往生伝の引用は、曼荼羅講説といった絵解きの場でこうした往生譚が語られたことを示し、往生伝の享受のありようとして見逃せない。

① 『龍舒浄土文』

本書は浄土教典の白眉とされ、法然をはじめ日本の浄土教者にも少なからぬ影響を与えた書である。『疏』では荊王夫人極楽訪問譚(卷十九)や延寿の画像を閻魔王が礼拝した話(卷二六)など、八話を本書から引用している。本書が『疏』や師聖岡の著作に引かれることについては、林田康順に教学的な見地からの論考がある⁽¹¹⁾。

『疏』では、往生譚としてのまとまりをもった部分を中心に用いている。つまり「説話」を意識的に抽出している点に、『疏』での本書の用いられ方の特徴がある。説話の取材源として本書を重用したという点が注目される。

② 『浄土瑞応刪伝』(往生西方瑞応刪伝)

本書は、体系的にまとめられた往生伝としては最古のものである。天徳二年に日延によって伝えられ、貞永元年に日真によって浄土教版が刊行されて以来、後世に

多くの影響を与えた書である。本書は唐の文諺と少康によって編まれた『浄土瑞応伝』をもとに道刪が削増減したものとされる⁽¹²⁾。日本に入つて来たのは『浄土瑞応刪伝』であったが、本書を『瑞応伝』と称したため、著者の誤伝も生じたようだ。『疏』でも『瑞応伝』と称しているが、聖聡は『観念法門私記相統抄』には「瑞応伝ト者、具ニハ往生西方浄土瑞応刪伝。沙門文諺与釈子少康録也。此伝一卷ノ内ニ総シテ僧俗四十八人ノ往生記ヲ挙グ」と記す。著者に関する誤解はあるものの、この記事によって『疏』のいう『瑞応伝』が『瑞応刪伝』を示していることが確認できる。

『疏』では尼浄真の往生伝など十もの話を引き、また『大経直談要註記』卷十七、卷二十にも本書から説話を引いており、聖聡が本書を説話の取材源として活用したさまが伺える。

③ 『偽戒珠往生伝』

『疏』では曇融橋往生譚(卷四五)を「往生伝云」として引き、妙蓮母往生譚(卷四八)については「出戒珠集」と注を付す。また、聖聡あるいは聖岡の作かと思われる『往生拾因見聞』も雄俊のことが「戒珠伝」に載る旨を記す。聖聡はこれらの書名をもって戒珠『浄土往生伝』を指すが、実は彼がいう書は『偽戒珠往生伝』と仮称される書で、『浄土往生伝』とは全く別の偽撰書である。本書は『浄土依憑経論章疏目録』にその名が見え、良忠・道光など鎮西流の学僧が用いた書である。

『疏』が本書をひくことについては塚本善隆に詳細な研究があるゆえ⁽¹³⁾、詳細はそちらへ譲る。

④ 『日本往生記』

『疏』では、佐世妻往生譚(卷十六)を「日本往生記」から、天王寺西門尼の話(卷二五)を「保胤ガ日本往生伝」から、勝如父母往生譚(卷四十)を「保胤ガ日本往生記」から引く。これらの書名が指すのは『日本往生極楽記』と考えられるが、西門尼の話は『極楽記』にはなく、また勝如父母往生譚も内容的には『後拾遺往生伝』に近い。したがって、『疏』のいう「日本往生記」は異本か誤伝であったと推測される。また、師聖岡に「日本往生伝」という著作があったらしいことから、あるいは本書を指すかとも思われるが、佚書ゆえ現在のところ確認はできない。

同様の事情は他にも見られ、時延夫妻の往生(卷四十)は「日本拾遺往生伝云」と出典が記されているが、『拾遺往生伝』にはなく、『後拾遺往生伝』にある。こ

うした書名の混乱は、注釈書などからの孫引きが原因の一つになっているのかもしれない。

⑤ 『天竺往生験記』

『疏』は小角豆念仏の話(巻二五)の出典を「五天往生記」と記し、『大経直談要註記』巻二十にも「五天往生記」という名が見える。この書名が『天竺往生験記』を指すことは、すでに高橋伸幸が確認している⁽¹⁵⁾。本書は天親記・羅什訳と伝えられるが後世の偽作らしい。『浄土依憑経論章疏』に「天竺往生伝 一卷 天親造羅什訳」と見えるのは本書であろう。やはり本書も浄土教典籍として鎌倉初、中期から用いられた書であったようだ。

本書は鎮西流白旗派僧実慧の『摧邪興正集』に引用され、また鎮西流名越派僧袋中が『五天竺往生験記端書』といった書を記していることから、鎮西流の僧侶の間に流布した書であったようだ。本書については高橋が紹介した諸本の他に、叡山文庫天海蔵と真如蔵に版本が伝わる。叡山文庫の二本が、聖岡の『隼疑問決集』との合一冊本であることから、本書の享受のありようがうかがわれる。

六、仏教説話集

『疏』では、仏教説話集の類からも説話を引いている。『疏』が引く仏教説話集は、いずれもすでによく知られた書で特別珍しいものではないが、經典だけでなく、こうした説話集が談義注釈の場で使用されていた例として注目されよう。

① 『三宝感応録』(『三宝感応要略録』)

本書は十一世紀末に日本に伝来した仏教説話集で、中世の説話や唱導に多大な影響を与えた書として知られる。『言泉集』『今昔物語集』『三國伝記』など、本書に取材した作品は多い。『疏』は十五話を本書から引用しているが、この数字は他の出典文献を圧倒する最多数である。また、聖聡は『大経直談要註記』巻四、巻一七、巻十九、『小経直談要註記』巻五、巻六でも本書から説話を引いている。

『疏』が本書を引くことについては、近本謙介によって詳細な報告がなされている⁽¹⁶⁾。近本は、聖聡が本書から引いた説話は浄土教典や阿弥陀に関するものに偏っていることや、引用するさい聖聡が多少の改変を加えていることを指摘する。聖岡が『伝通記糅鈔』に本書を引いていることから、おそらく、聖聡は聖岡の指導もとと本書に触れたものと想像される。浄土宗の談義所での学僧教育に、こうした仏教

説話集が取り入れられていた証左となる。

② 『注好選』

本書は『今昔物語集』や『源平盛衰記』のほか『法華懺法私』『説教才学抄』などの仏書に引用される。聖聡が、本書を『疏』巻四一で引き、また『大経直談要註記』巻四『小経直談要註記』巻二、三でも引くことは、すでに今野達と高橋伸幸によって指摘されている⁽¹⁷⁾。本書は現在のところ編者未詳の書であるが、聖聡は『大経直談要註記』巻四で「注好選ノ中ニ云ク(弘法大師作三卷書也)」と示しており、本書を空海の著作であると解していたようだ。また、聖聡あるいは聖岡の著作であろうとされる『往生拾因見聞』にも『注好選』の引用がある。聖岡は『二蔵義見聞』巻八に本書を引いており、本書も前述の『三宝感応録』の場合と同様、聖岡の影響で聖聡が用いた書と見てよからう。

③ 『百因縁』(『私聚百因縁集』)

『疏』が『私聚百因縁集』を引くことは早くに指摘され、まとまった論考もすでにあるゆえ⁽¹⁸⁾、詳細については先行研究に譲ることにし、ここでは若干の私見を述べるにとどめる。

「百因縁」と注記された話は、巻四に載る智光墮地獄説話と婆羅門僧正の話の二話のみだが、注記はないものの『私聚百因縁集』を参照しているとみられる話はこの他に数話ある⁽¹⁹⁾。また、聖聡は『大経直談要註記』巻十七に触れる無律比丘の因縁説話や、『鎮西宗要本末口伝鈔』に載せた乾陀羅國の大蛇の話の部分で、いずれも「百因縁」に拠ることを示している。

『私聚百因縁集』は、序によって常陸で成立したことが知られる。聖聡は修行時代を常陸の瓜連談義所に学んでおり、あるいはこのとき、『私聚百因縁集』に触れたのではないかと私は推測する⁽²⁰⁾。本書が関東の浄土宗僧の間に流布していた様子は、例えば鎮西流名越派の袋中が『枕中書』に引用していたり⁽²¹⁾、その叔父良要の『三語集』に影響が見られる⁽²²⁾ことから伺えよう。

七、その他の注目すべき文献

以上、大まかなジャンル別に古典文献を考察してきたが、本章ではそれらのジャンルからはずれるもので、注目すべき古典を取り上げる。

① 『釈迦譜』

『釈迦譜』は中国最古の伝で、平安時代以来、釈尊伝の有力なテキストとして利用されてきた。聖聡は本書を『大経直談要註記』巻五で随所に引用しており、本書は聖聡の座右の書であったようだ。『疏』が出典を『釈迦譜』と明記する話は、巻十四の釈迦の四門出遊説話のみだが、巻二の前半部に見える、釈迦の誕生から涅槃までの物語は、『釈迦譜』を根本依拠資料として見ると見てよいだろう。巻二の釈尊伝には、そのほかに「本起経」（『修行本起経』）を出典として示す記述もあることから、聖聡は一つの資料に依拠したのではなく、いくつかの資料にみえる伝を継ぎ合わせるかたちで釈迦の一代記を編んだことがわかる。このように複数の資料を複合させて釈尊伝を成すことは、日本における釈尊伝形成の一般的なありかたであった⁽²²⁾。

② 『止観輔行伝弘決』

本書は『摩訶止観』の注釈書で、天台学徒の入門書として、さらには仏教における百科全書として広く読まれた。『疏』では「弘決」と略称して引用する。聖聡は『大経直談要註記』巻二三、『小経直談要註記』巻五、巻六でも同様に「弘決」または「輔行ノ記」と称して引用している。

『疏』巻四三に載る五郡の孤児の話は本書巻四から引いたものである。本話は、『法華百座聞書抄』三月二七日条・『私聚百因縁集』巻四・『直談因縁集』巻一にも載り、また『澄憲作文集』にもこの話に触れる一節があることから、唱導の場面で用いられることの多い説話であったようだ。

納富常天は、本書およびそこに引用された外典について注釈した『弘決外典鈔』に着目し、東国におけるその受容について考察している⁽²³⁾。納富論によつて、外典研究にも熱心だった称名寺の学僧の実態が明らかになったが、そうした状況は聖聡をとりまく浄土宗談義所にもあったと想像される。外典を豊富に引き難解な教理を平易に説こうとした本書は、談義注釈をする聖聡にとって有益な資料であったに違いない。

③ 『大蔵一覽集』

『疏』巻十三に見える、李信の母が馬に転生する話は「法苑珠林云」という書き出しで始まるが、実際には聖聡は原典から本話を引いていない。それは、本話の末尾にある注記「書字函第二卷」から知ることができる。この注記は大蔵経の分類符号を示すものであり、大蔵経の要文抜書を集めた『大蔵一覽集』に記される注記で

ある⁽²⁴⁾。

『疏』は、袈衣をめぐる釈迦と難陀・調達の話（巻二）の出典を「已上大蔵一覽」と割注に示しており、聖聡が本書を見たことが確認できる。聖聡は『大経直談要註記』や『厭穢欣浄集』でも本書から説話を引いており、説話の取材源として活用したさまが伺える。

『疏』では本書から説話を引用するさい、「本起経曰」（巻二）、「法苑聚林云」（巻十三）など原出典を示す部分も含めて引用している。つまり、聖聡は原典にあたることなく、『大蔵一覽集』から孫引きをしているのである。したがって、こうした例は他にもあったと考えられ、経典を出典とした説話も、聖聡が直接原典に当たっていない場合もあることを考慮しなければならない。

本書には応永十年刊の五山版が存在する⁽²⁵⁾ことから、ちょうど聖聡の時代に流布した書であると推測される。また、真福寺蔵『大福田寺目録』（文和五年奥書）に「大蔵一覽 二十巻」と見えるが、本記事は『言泉集』や『古事談』など唱導に用いたと思しい一群の書名の中にある⁽²⁶⁾。十四世紀の前半に本書がすでにこうして使われ方をしていたことが伺われる。

④ 『仲文章』

本書は平安後期成立とされる幼学書である。『実語教』『注好選』と密接な関係が認められ『宝物集』や『平家物語』に引用があるなど、広範囲に渡って影響を与えた書である⁽²⁷⁾。『疏』は巻十一に「班夫カ母ヲ罵、西夢、父ヲ打シ其過、仲文章ニ載ル如シ」と記すのみで、具体的に説話の筋を紹介しているわけではないが、「仲文章」の享受の広がりを考えるうえで注目されよう。聖聡は『疏』のほかに『観念法門私記相統抄』下巻にも本書を引く。

⑤ 『四十八願釈』

『疏』が引くのは、孫陀羅尼に執心する阿難に釈尊が天国と地獄を見せて発心させる話（巻十四）で、『四十八願釈』第三十六願に載る話である。本書は『無量寿経』に説く阿弥陀仏の四十八誓願を注釈した書で、安居院聖覚の作とされる。聖覚作を疑うむきもあるが、聖聡は『疏』で「聖覚四十八願抄」と呼び、『大経直談要註記』巻八で「聖覚法印四十八願釈」とするゆえ、彼は本書を安居院聖覚作と理解していたらしい。また、聖聡は『大経直談要註記』巻九から十六に本書を随所に引用し、非常に重要視した。この他、聖聡は『厭穢欣浄集』下巻に、出典は示さない

ものの、あきらかに本書の内容を引いている。説話を豊富に含み、談義注釈を役とする聖聡にとって、本書は興味深い書であったと思われる。本書の享受については『大経直談要註記』に関して論じたことがあるゆえ、詳細は拙稿へ譲る⁽⁸⁾。

⑥ 『役行者本記』

『疏』は卷六冒頭部で当麻寺の創建に役行者がかかわったことに触れ、続いて彼の一代記を記す。その内容の多くは『私聚百因縁集』に拠るが、そこにはない話も含まれている。たとえば、母が独鈷を飲んだ夢をみて行者を身ごもった話などは『私聚百因縁集』にはない。聖聡はおそらく『私聚百因縁集』のほかにもいくつかの文献を参考にし、また当麻寺を訪れたさい取材した話もくみ取りつつ、この一代記を記したと推測される。そのさい、参考にした文献の一つとして注目したいのが『役行者本記』である。

聖聡は役行者一代記の末尾に「委細、本記ニ在リ」と記す。ここにいう「本記」は『役行者本記』ではなからうか。本書は、行者の伝記として一書にまとめられた最初のもので、室町時代の修験道の隆盛に伴い流布し、後代の伝記編纂に多大な影響を与えた。本書には、母が独鈷を飲んだという生誕奇瑞説話が載り、成立が室町時代であることから、『疏』所収話の典故としてまず注目すべき文献である。成立に關しては文亀元年ごろか、天正八年ごろが推測されている⁽⁹⁾が、『疏』のいう「本記」が本書だとすれば『疏』が成立した永享八年には存在していたことになり、本書の成立は従来説より若干遡ることになる。

聖聡が本書を見ていたことは成立年の問題としても注目されるが、加えて興味深いのはこうした修験道の書を彼が見ていたということだろう。

むすび

『疏』所収の説話の取材源は多種多様である。經典・注釈書・往生伝・高僧伝・説話集・説草から直接の見聞によるものまでジャンルの幅が広い。したがって、所収話の取材源の傾向を一概にいうことは難しい。出典の多様さこそが『疏』の特徴である。

こうした『疏』所収話の特性には、どんな背景があったのだろうか。

『疏』が、何処で、誰のために編まれたものかについては『疏』自身は語らないが、おそらく談義所での学僧教育のために編んだものと考えてよからう。「先ノ密

教曼茶羅ハ昨日細ニ釈シ畢。今日ハ頭教曼茶羅ヲ積ス」(卷二)などというように談義の過程を示唆する表現が本文の中に数カ所見られることから、何日かに渡っての談義を記録したものと推測される。聖聡自身が常陸の瓜連談義所で学んでおり、また増上寺で学僧教育にあたり、小石川談義所の経営に關わった経歴から推して、『疏』の成立に談義所での学問が深く關わっていることは想像に難くない。

『疏』所収話の多様性は、談義所での学僧教育の内容の豊かさや幅広さを物語る。天台宗の学僧教育は仏典だけではなく『和漢朗詠集』のような外典にも及んでいた⁽¹⁰⁾が、浄土宗のそれにも同様の事情があつたことは、聖問『古今序註』の存在やそれを聖聡が引用していることから明らかである。私は以前、談義所での学僧教育の内容の幅広さについて、関東における各宗派の教線拡大競争が背景にあることを考察した⁽¹¹⁾。談義の場で聴衆を惹きつける工夫として、文芸の学習が必要だったのである。

当麻曼茶羅の講説は図像で説経をする視聴覚教育である。こうした活動は在家信者の獲得に有効に働いたであろう。講説の場では単に図像を用いただけではなく、様々な興味深い説話を織り交ぜて説経したのではなからうか。『疏』はそうした魅力的な布教活動を展開する優秀な人材を育成するために編まれた、と私は考える。俗耳に入りやすく親しみやすい説話を内外を問わず博搜した結果が、『疏』所収の多様な説話群ではないか。学僧の学問が世俗的な興味に応じて成した書といえるだろう。

本稿では『疏』所収話のうち出典が明記されているものを中心に扱ったが、出典の示されない話も少なくない。それら出典未記載の説話の多くは、他の部分で引用したことが明らかでない文献、たとえば『私聚百因縁集』や『当麻曼陀羅不審問答抄』などを出典としているが、現段階では出典の明らかでない話もある。そうした出典未記載の説話の取材源が解明されてくれば、『疏』所収話群のもつ世界がより広がりをもつことになろう。さらなる探求を試みたい。

注

- (1) 大谷旭雄「新出『當麻曼陀羅不審問答抄』について」(『三康文化研究所年報』二〇号)は了惠道光とし、加藤義諦・吉良潤・稲田順学「『當麻曼陀羅不審抄』の成立問題」(『深草教学』9号)は鏡鏡證入かと推定する。また、仏教大学図書館所蔵本の奥書は、後者の論文に掲載されている。
- (2) 前掲大谷旭雄論文(注1)に指摘される。
- (3) 牧野和夫「七寺蔵『大乘毘沙門功德経』と「因縁・説話」」(『中国日本撰述経典(其之四)・漢訳経典』大東出版社)
- (4) 牧野和夫前掲論文。
- (5) 徳田和夫「『月日の本地』の典拠小考」(『神道大系月報』八六)
- (6) 『観念法門私記見聞』では「浄土因縁経」と記す。これは聖聡が良忠『観念法門私記』の表記を踏襲したもの。良忠が本経から引用した経文の一節が、『浄土本縁経』に認められることから、同一の経典を指すと判断してよからう。
- (7) 徳田和夫「『三國伝記』の歌徳説話—古今序注との関わりから」(『国語国文論集』十二号)
- (8) 拙稿「『当麻曼陀羅疏』と常陸—聖聡の説話享受—」(『仏教文学』二四号)
- (9) 浄土宗全書本、およびその底本である慶安二年版本でも「了普上」。「人」が脱落したものか。元亀写本では「了普上人」。
- (10) 「往生伝の中世的変容—法然門における往生伝の形成をめぐって—」(『仏教文学の構想』新典社)
- (11) 「王日休『龍舒浄土文』の影響—聖聡上人『當麻曼陀羅疏』を中心として—」(『仏教論叢』三六号)
- (12) 小笠原宣秀「瑞応刪伝の諸問題」(『支那仏教史学』三卷三・四号)
- (13) 塚本善隆「真福寺蔵鎌倉古鈔『往生浄土伝 桑門戒珠集』は宋の戒珠の撰に非ず—鎌倉時代の浄土宗学者と疑問の『戒珠集』」(『塚本善隆著作集』六、大東出版社)
- (14) 「『私聚百因縁集』の出典に関する報告」(『中世文学』二六号)
- (15) 近本謙介「浄土宗談義書における説話覚書(一)」(『詞林』八号)
- (16) 今野達「東寺観智院本「注好選」管見—今昔研究の視覚から—」(『国語国文』五二

卷二号通卷五八二号)、高橋伸幸「『小阿弥陀経私抄』所引の『注好選』」(『いずみ通信』九号と十一号)

- (17) 高橋伸幸「『私聚百因縁集』『大経直談要註記』等の説話末尾に記載される割注の一種について」(『札幌大学女子短期大学部紀要』四号通卷二四号)、北海道説話文学研究会「『私聚百因縁集の研究』本朝編・上(和泉書院)など。
 - (18) 該当箇所については高橋伸幸「『私聚百因縁集』所収説話の出典と同話(一覽表)」(『解釈と鑑賞』五八巻十二号)、または拙稿「『當麻曼陀羅疏』所収説話一覽—出典・関連説話—」(『人間文化研究年報』第二四巻) 参照
 - (19) 前掲拙稿(注8)
 - (20) 湯谷祐三「『私聚百因縁集』と檀王法林寺蔵『枕中書』について」(『名古屋大学国語国文学』八四号)
 - (21) 渡辺匡一「如来寺蔵『三語集』について—浄土宗名越派の説草集—」(『説話文学会大会口頭発表表、於同志社女子大学二〇〇一年六月二四日』)
 - (22) 竹村信治「釈尊伝」(『解釈と鑑賞』第五一卷九号)
 - (23) 納富常天「東国仏教における外典の研究と受容」(『金沢文庫資料の研究』法蔵館)
 - (24) 高橋伸幸前掲論文(注17)。湯谷祐三前掲論文(注20)
 - (25) 未見(付記参照)。成實堂文庫蔵。川瀬一馬編『お茶の水図書館蔵新修成實堂文庫善本書目』に所載。なお本稿では大正大学蔵寛永十九年版本を参照した。
 - (26) 牧野和夫「十三世紀中後期をめぐる一、二の文学的な場について」(『中世文学会秋季大会第八九回大会口頭発表表・補足追加分』)
 - (27) 山崎誠「『仲文章』瞥見」(『国文学研究資料館紀要』十四号)
 - (28) 拙稿「聖聡の談義における聖覚『四十八願釈』享受—『大経直談要註記』を中心に—」(『国語国文』七十巻九号)
 - (29) 宮家準編『修験道辞典』(東京堂出版)
 - (30) 山崎誠「天台談所と和漢朗詠集」(『中世文学』三三三号)
 - (31) 前掲拙稿(注8)
- (付記)
『大蔵一覽集』の調査については、お茶の水図書館の佐藤裕一氏と岡本佳之氏に、大変お世話になりました。文庫の改築中で閲覧不可のおり、詳細な情報をご教示いただき、心より

感謝申し上げます。

また、貴重な資料の閲覧をご許可くださった大正大学図書館に、深謝申し上げます。

平成六年度生 比較文化学専攻

(二〇〇一年十二月十四日受理)

A study of Taima Mandala Sho

UENO Mami

The Taima Mandala Sho was written during the Muromachi period by the monk Shoso(1366-1440) as a commentary on the Taima mandala. This mandala was extensively used as part of proselytizing activities by monks of the Jodo(Pure Land) sect from the middle ages to the early modern period. Shoso's commentary is rich in detail and is an invaluable resource for the study of these activities in their period. The wide range of sources utilized in the commentary testifies not only to the breadth of Shoso's scholarship, but also to the richness of the education available at the monastery in which he received his training.

Utilization of the Taima mandala enabled preaching to be supplemented by visual information, and this was no doubt effective in bringing new followers into the Jodo sect. Explanations of the mandala did not focus on what it presented in pictorial form alone, but included discussions of numerous other subjects of deep interest. It is my contention that the Taima Mandala Sho was compiled to aid in training monks in this form of proselytization.

Key word: Taima Mandala Sho/Taima Mandala/Shoso